



ニルヴァーナ

ni rvana



第1号 平成15年7月



本部：平田是賢（大円寺）
三重県桑名市入江町31 〒511-0086

電話：0594-23-1316

Fax: 0594-22-9382

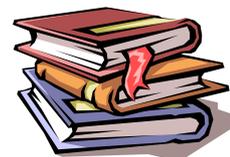
東京支部：

並里まさ子

群馬県吾妻郡草津町乙641-12 郵便377-1711

電話/Fax: 0279-88-6692

e-mail: fukenc@dan.wind.ne.jp



ご挨拶

日本にもアジアにも、地球上には様々な人間の暮らしがあります。

私たちが無意識に送っている日々の生活が、ある人々にとってはとても困難であることを知ったとき、そしてこの人たちが朝な夕なの祈りを捧げる姿に出会った時、改めて豊かさというものの本質を問い直す手がかりが与えられるように思います。

毎日忙しい生活に追われる私たちですが、ほんのひと時これらの人々に握手を求めて手を差し伸べて見てください。私たちは共に今を生きていること、生かされていることを深く共感することでしょう。このニルヴァーナは、私たちが共有したい情報を提供し、共に考える場として発展していくことを目指しています。

沿革

日本のハンセン病元患者さんたちとの交流は、10年ほど前の大円寺前住職の存命中にさかのぼります。ある日寺の応接間に、東京都東村山市の多磨全生園から、数人のお客様をお招きしたのが始まりでした。

ハンセン病を患ったことのある元患者さんたちの多くは、「らい予防法」という法律の下で、また人々の無知と無理解によるいわれの無い差別を恐れて、生活の全てを療養所の中に閉じ込めてしまう結果になってしまいました。そこで故郷の三重県に来て、訪問できる親族の無いこの方々を、お招きしたのが始まりです。一緒にお抹茶を戴き、楽しい昔話りのなかでお昼ご飯を食べながら過ごしました。前住職の没後は、その遺志を継いで療養所を慰問したり、目の不自由な人のために朗読テープを送ったりと、ささやかな交流が続きました。

またインド、ネパールとの交流は、およそ30年前、前住職とその檀家の有志が佛跡巡礼のため、インド、ネパールを訪問したのが始まりでした。その時、インドで通訳をしてくださったスッパ氏をとおして、インドやネパールからの留学生と出会い、かれらのお世話をすることがありました。それ以来、主として東南アジアからの学生、研修生との交流が続いております。いろいろな出来事がありましたが、日本で出産した留学生のお世話をしたときは、本当に多くの人の協力がありました。

投稿ご案内

ニルヴァーナ編集部は、皆様からのご意見を歓迎いたします。本誌に掲載し、さらに多くの方々に紹介して、意見交換の場としても活用させていただきます。



東京支部の紹介

日本のハンセン病療養所に勤務する医師とその仲間たちで構成しています。
 平成8年、100年近く続いた「らい予防法」が廃止されたことは、どなたの記憶にも新しいことと思います。
 しかし今なお多くの元患者さんたちは、過去を隠して生活しています。単純な無知が、意味の無い差別を
 存続させ、たくさんの悲劇を生んできた事実は、私たち自身の生き方を振り返ってみる契機となりました。
 一方これまでの諸外国との医療協力を経て、途上国から招いた研修生や世界のハンセン病対策に情熱を
 燃やす研究者達と連携した、世界規模のネットワークを持つことができました。彼らとともに、山積され
 た諸問題と向き合う中で、これらはさらに多くの人々に伝えるべきメッセージであることに気がきました。

連携団体（組織）の紹介

特定非営利活動法人：T・M良薬センター (TMRC)

理事長：小野文瑠

事務所：群馬県前橋市総社町総社1024 〒371-0852

電話/Fax：027-254-2325

主として群馬県の日蓮宗寺院団体が組織するNPO

群馬県の草津にある国立療養所栗生楽泉園は、昨年創立70周年を迎えたハンセン病療養所ですが、この療養所に数十年来慰問を続けている団体です。近年は、ラオス、カンボジア、ベトナム、タイ、スリランカなどのアジア諸国にも広く援助網を持つ組織ですが、この度群馬県から認知を受けたNPOとして、ヤンゴン（ミャンマー）に新たな一歩を踏み出しました。



平成15年4月、TMRCのメンバー6人と共に、ミャンマーの社会福祉省を訪問しました。緊張した会議が終わって、皆で記念撮影となりました。ロンジー姿もキマッてますねえ。今後の活躍が楽しみです。



FIWC (フレンズ国際労働キャンプ・関東委員会)

委員長：藤澤真人

神奈川県横浜市神奈川区西大口116-15

HP：http://www.mognet.org/

< 本誌の内容は、このホームページにてカラーでご覧になれます。 >

主として早稲田大学学生とOBよりなるボランティア組織

ハンセン病患者やその回復者たちと、40年以上に渡って交流を続けている集団です。友情の和は国内外に大きく広がり、韓国、ネパール、フィリピン等、アジアの各地に草の根レベルの友好組織を持ちます。今年4月、中国広東省のリン HOW 村に一人の若者：原田僚太郎君を派遣し、彼は今村人とともに生活しています。社会から忘れられていたハンセン病快復者の住む村を、地域との交流をもつ開かれた村にし、中国にハンセン病支援のネットワークをつくるという目標を掲げて、隣接地域の学生と活動しています。



トイレ造りが始まります。

立派なトイレができました。





ミャンマーの孤児院紹介

首都ヤンゴンには、華麗な高級ホテルや荘厳なパゴダもたくさんありますが、小さな孤児院もひっそりと町の中に紛れ込んでいます。そんな孤児院の一つを訪ねました。

一人のお坊さん（ウ・マガインダ院長）が、現在80人以上の孤児を養っています。ここにいるのは男の子だけで、女の子は少し離れた別の家に住んでいます。今4人の女の子が看護学校で勉強していると、院長さんは嬉しそうでした。

私たちが訪問した日はちょうど得度式の前日で、みんな頭をきれいに剃って明日の儀式に備えていました。早々と赤茶の僧衣を着ている子もいました。

子供たちの食事のほとんどは、朝の托鉢で賄われています。小乗仏教の国ですから、人々はみな托鉢僧に食物の用意をするのが日課になっていますが、孤児院の子供たちの托鉢には、たくさんの食物を入れるのだそうです。

月に1度、近所のお医者さんが診察に来てくれるそうです。また子供たちが病気になったときも、診て下さるそうで、これも市民の無料奉仕です。仏様の奉られている部屋の隅に薬戸棚がありました。扉を開けると、ネズミの糞に混じって古い薬が幾つかありましたが、医療の質までは期待できないようです。



寝室は二階の大広間で、80人分の寝具と着替え（といっても毛布が2枚と2、3組の衣類）が、それぞれきれいに畳んで並んでいました。この真新しい建物は、ベトナムの篤志家からの寄贈によるものだと聞きました。子供たちの明るい笑顔が、ここでの生活を物語っているようです。養い親のお坊さんは、私を庭の片隅にある倉庫のような薄暗い建物に案内し、ここに小さな診療所を作りたいのだと言いました。子供たちの出身地はミャンマー全土に広がり、北のシャン州やカチン、カヤーからも来ているそうです。ミャンマーは、民間レベルの相互援助が自然に根付いているように思えます。



ウ・マガインダ院長と、TMRCメンバーの会見：孤児院への寄付金をお渡ししています。



ここに小さな診療所を作ることが、院長さんの夢です。



名前の由来：ニルヴァーナは、涅槃（ねはん）のことです。

仏教伝導協会出版の『仏教聖典』によりますと、涅槃とは梵語の「吹き消す」という意味の単語の漢音写で、「滅・滅度」・「寂滅」等と訳され、ローソクの火を吹き消すように、欲望の火を吹き消したものが到達する境地で、これに到達する事を「入涅槃」、達したものを「仏陀」と呼びます。釈迦牟尼仏がなくなった瞬間を「入涅槃」とも言われますが、肉体が滅びた時に完全に煩惱の火が消えるという考え方から、普通は35歳で仏になったときに「涅槃」の状態に達したと考えられています。